

火狩りの王

〈三〉影ノ火

炎をいだいて 獣がうごめく

罪どがの森を 照らすもの

姫神の生める 火狩りの鎌

いまわの星にも 千世^{ちよ}に生きよと

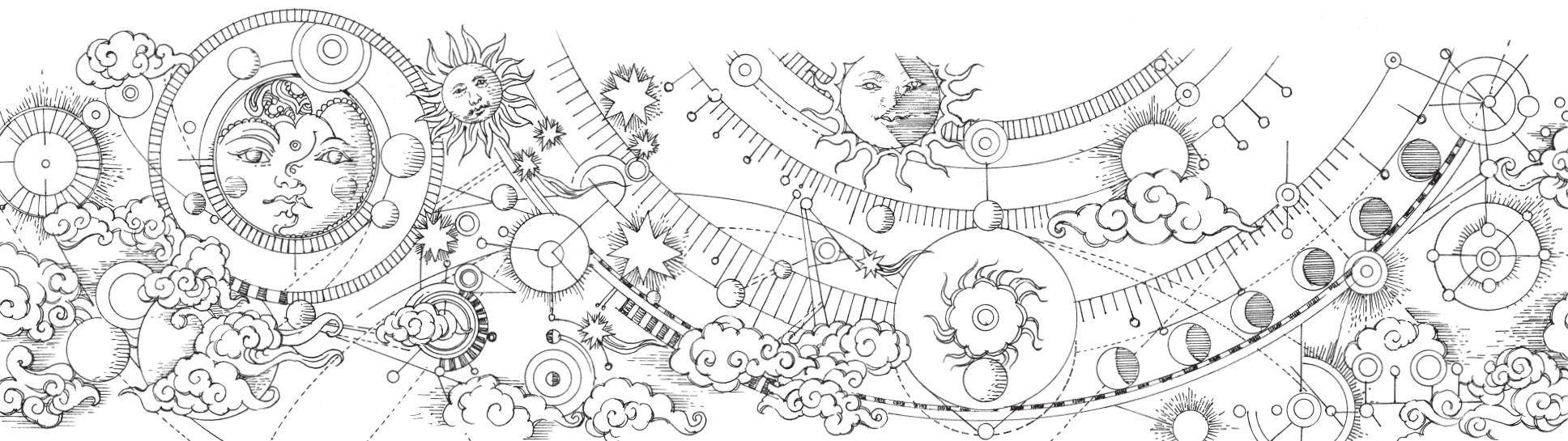
こぼれ出でたる 金の三日月

第三部 神々の庭

- 一 火の獣 けもの 8
- 二 家 36
- 三 密告 70
- 四 照らすもの 101
- 五 老木の井戸 137
- 六 遠雷 えんらい 193

第四部 翔ける者、這う者

- 一 夜半の鳥 214
- 二 円 240
- 三 願い文 ねがふみ 265
- 四 針 286
- 五 異形の子ら いぎよう 306
- 六 破片 はへん 355
- 七 波間の記憶 きおく 383
- 八 月の鎌 かま 407



灯子 十一歳の少女。自分をかばって命を落とした火狩りの形見を家族にとどけるため、首都へ向かう。

煌四 首都に暮らす十五歳の元学生。油百七の元で、雷火の研究を行う。火狩りを父に持つ。

かなた 灯子が出会った火狩りが連れていた狩り犬。火狩りとともに行動し戦う。

緋名子 煌四の妹。胎児性汚染により生まれつき病弱。

明楽 流れ者の女火狩り。困難をこえていく力量の持ち主。狩り犬はてまり。

火穂 厄払いの花嫁として村を出された。回収車で灯子と出会う。

照三 回収車の乗員。灯子たちを首都に連れて行くところゆいで大けがを負う。

クン 〈蜘蛛〉の子とも。森に捨てられていた。

炬六 島出身の凄腕の火狩り。狩り犬はみぞれ。

油百七 燠火家の当主で偽肉工場の経営者。煌四に雷火による武器開発を指示。

綺羅 燠火家の一人娘。美しく聡明。

火華 油百七の妻。年齢不詳の妖艶な夫人。貧民区出身。

ほたる 厄払いの花嫁。回収車で灯子と出会う。

紅緒 厄払いの花嫁。回収車が襲われて命を落とす。

第三部 神々の庭

一 火の獣

「……密航？」

耳に慣れない言葉を、煌四は暗闇の中でくりかえした。

「ああ、そうだ」

こたえる声は、ななめ後方、煌四の頭より高い位置からかえってくる。狩衣をまとった炉六が、無駄な音を一つも立てずに、びたりとうしろをついてくる。動きにくそうにしか見えない狩りの装束は、火狩りの身動きに従順に沿い、その気配も体温すらももらさないよう、吸いとっているかのようだった。

照明のない、巨大なトンネルの中。天井の高さはどれほどのものだろう。外からは、結界である鳥居の形に沿ってこの大きな穴はうがたれて見えたが、中ではどうなっているのか、てのひらや靴底がふれる部分以外はたしかめることができない。煌四は左手を壁にそえ、手探りで進んで

いる。前を行く狩り犬のひそやかな足音だけが、道しるべだった。

「鳥はせまいし貧しくてな。暮らしに嫌気がさして、首都にもどる調査船に乗りうと思ったんだ。だが、正規で乗るには、ばかみたいに船賃がかかるからな。船の機関部に忍びこんでこちらまで来て、しばらくは流れの火狩りをやっていた」

「首都づきになったのは、どうして……」

トンネルの通路は曲線をえがいた構造になっているらしく、前方に出口は見えない。

「ん？ ああ、金だ金。同じ仕事なら、神族という雇い主があるほうが儲かるだろうと思ったのだ。しかし、首都づきというのは規定が多くて、なにかと不便だな」

首都の火狩りとして登録されれば、狩りによる犬や道具の損傷も補償され、安定した賃金が手に入る。ただし、流れの火狩りと同様、危険な仕事であることに変わりはない。

あっけらかんと言う炉六の声に、言葉に表されていない虚ろを感じたが、煌四はそれについてはずねなかった。しなやかに、ほとんど足音をさせず前を行く犬の気配を見失わないよう、感覚を澄まそうと努めた。トンネルの中では、自分のつま先すら見えない。ともすれば、靴をはいた煌四の足音が、先導する犬の気配をかき消してしまいそうだ。

「だけど、それなら……燐火家へ雷火を持ってくるなんて、神族がさだめた規定を、どうして破っ

たんですか？ 首都の火狩りが個人的に火を売買することは、禁じられてる」

そう言うのと、背後の炉六がからからと笑った。

「おかたいやつだなあ、ガキだというのに。まああれだ、鎌をかけてみたのだ」

「鎌？」

「煉火家の御仁、あれはまるで化け物だな。人を人とも思っちゃおらん。島ではああいうのを、人の皮をかぶった鬼と呼んだぞ。お前、よくあんな家の養子になったもんだ」

背後からの言葉に逆なでされ、煌四は思わず足を止めて、炉六がいるあたりにむきなおった。

「昼間言ったはずだ、親子になったわけじゃ……」

そのとたん、見えない手に肩を押され、煌四は心臓を吐き出しそうなおののいた。すぐにそれが、炉六の手なのだと気づく。

「いきるなよ、そういうところはきちんとかきなんだな。ほら、ちゃんと前をむけ。おれの犬は気まぐれでな、うかうかしていると置いてかれるぞ」

煌四は前をむき、炉六の狩り犬、みぞれの足音をとらえなおしながら、うつむいた。

「……妹が、病気なんだ。親が死んで、身寄りがなかった。だから」

はあん、とまた背後で炉六の声がした。思わず打ち明けた煌四の話に、あごでもさすっている

のだろう。

「蓄えはなかったのか？ 雷火を採るほど腕の立つ火狩りなのだろう、お前の親父どのは。自慢の父親だったのだろうが」

煌四の返答は胸の奥でもつれ、火狩りの飄々とした声に追いつけない。宴席で火狩りたちが煌四と話すのを見ていた炉六が、煌四の父親が火狩りだと察したのはわかるが、なぜ雷火のことで知っているのだろう？ ——油百七が、話したのだろうか？

まるでその疑問を暗闇の中から読みとったかのように、炉六がつづけた。

「お前を見ていれば、顔つきでわかる。おれの友人もその昔、でかい火に魅入られて、同じような顔をしていた。友人が夢中になっていたのは、雷火とはべつの火だったがな。……うまい肉を作る工場の経営者が、火狩りのせがれをかこいこんで、雷火でなにをしようとしているんだ」

煌四は、黙って歩いた。暗闇に吞まれてはつきりと見えない指先が、しびれている。

《蜘蛛》が首都を襲うかもしれないということを、もとは流れ者だというこの火狩りなら、知っ
ていても不思議ではない。わざわざ煌四に言わせなくとも、すでに大方の察しはついているかもし
れない。が、いずれにしてもこのことは、油百七から口外を禁止されている。煌四は黒い森へ
通じる闇の中で、うっかり口をすべらせることのないよう、胸の中に警戒の糸を張った。

「……ぼくが知りたいのは、雷火と炎魔の火について。それだけです」

かたい声で、そうこたえた。

「ほう、そうか」

声の調子をそのままに炉六が言い、そして前方に、ぼんやりとした明るさが見えてきた。森だ。

背骨を何百という見えない手からめとられたようで、勝手に足がすくむ。みぞれのうしろすがたがためらいなく進んでゆく。炉六が鎌を手にしたのが、気配でわかった。

夜の森をほの明るいと感じたのは、自分の手足すら見えないトンネルの闇に目が慣れていたせいだった。靴をはいた足が、踏んだことのない感触にぞくりとおのく。甘ったるさをふくんだ不快なおいが鼻にからみついてくる。まともに嗅いではならない、直感がそう判断する、そんなにおいだ。

「ふつうは、夜に狩りはせんのだ。こっちの目がきかん。——だが、夜のほうが獲物はよく捕れる。炎魔が、人のともす明かりに寄ってくるからな」

背後が急に明るくなる。炉六が、持っていた携行型の照明に明かりをつけたのだ。小型照明によって、黒い森の威容が浮かびあがる。不吉にただれた、異形の木々。ねじれた枝をからませあ

い、空を遮断しているそのすがたは、呪いのようだった。何者かが大地を呪い、その呪いがはたされたかを見とけないままに放置したかのような。朽ち葉の堆積した土は、ぬちゃぬちゃとねばりつく。

「見せてやろう。いいな？ おれのうしろにいるんだぞ」

炉六の言ったその言葉を、煌四の耳はほとんどとらえていなかった。ほっそりとしたみぞれの鼻先が、気配をとらえて上をむく。

襲撃はすみやかだった。

ギィ、とひずんだ声とともに、上からなにかが降ってきた。野良猫、とっさにそう思った煌四は、樹上から飛びかかってきたその小型の獣の形が、町でよく見る動物とはまるでちがうことに遅れて気がつく。菱形の、滑空する体——獣には、四肢をつなぐ皮膜があるのだ。

四角くひろげた皮膜に気流をつかみ、黒い獣はこちらめがけて飛んでくる。体に対して大きなその目は、赤々と燃える火の色にきらついていた。炉六のとした照明が、狩人のねらいどおり、一瞬にして炎魔の標的となった。

「ムササビか。小さいな」

右手に火の鎌を持ちながら、火狩りはそれを動かそうとしない。空気と重力を最大限に活か

て、炎魔は飛んでくる。速い。

が、みぞれの跳躍が、空を切る突進をあつさりとはばんだ。細い狩り犬は高々と身をおどらせ、主を襲おうと飛んでくる炎魔を空中で牙に捕らえる。着地するなり、みぞれはじたばたとあかく獲物を、炉六のもとへ運んできた。

牙から解放された炎魔のちっぽけな尾を、わらじをはいた炉六の足が踏みつける。はげしく暴れる炎魔のどへ、ためらいなく鎌の切っ先を刺し入れ、引きぬいた。なんの抵抗もなく刃は黒い毛皮を裂き、暴れ狂っていた獣はすべての動きを止めて絶命した。傷口からとぷりと金色の液体がふくれあがって流れ出る。それを炉六は、なめした革でできた火袋へと入れ入れた。

「ちゃんと見ていたか？」

火袋の口を縛り、炉六が呆然とつっ立ったままの煌四をふりかえる。その表情は飄々として、狩りがはじまる前とまったく変わらない。

ほんの一瞬のできごとだったのに、煌四の足はこわばって、動かすときしみをあげた。どっと汗が噴く。

しとめられた炎魔は、その小さな体をくたりと土にあずけきり、捨てられた古布のようになっている。ぎらついて燃えていた目玉の光はかき消えて、闇と見わけがつかなくなっていた。

(……言ってたとおりだ)

煌四は、狩りからもどった父親の語った言葉を思い出した。人と見れば見境なしに襲うくせに、金の鎌で捕らえたたん、あっさりとその身の内の火をさし出すという。……

立ちつくしたまま炎魔の死骸を見おろしている煌四を、炉六が笑った。

「なんだ坊主、怖いのか？」

煌四は、あわてて頭をふるう。この森の中で、ぼんやりしては命にかかわる。

結果を越え森に立ち入ってなお、体に追いつかない感覚のはしが、べつな音をとらえた。獣の足音だ。大きい。大きい、まだかなり遠い、はずだった。

「おう、崖の炎魔が駆逐できていないのか。こいつは上に報告せねばならんのかな、面倒な」

照明を地面に置き、炉六がふりかえる。同時に、火の鎌とはべつの武器、腰に帯びた短刀をぬきとる。煌四が目をやったとき、すでにみぞれのすがたは消えていた。

遠いと感じた足音の主は、あつというまに小石の粒をはじいて、照明のとどく範囲へすがたを現す。トンネルのうがたれた背後の崖、その急峻な斜面を、一頭の炎魔がはねおりてくる。大きく湾曲した一對のつものを持つ、それはまっ黒な山羊だった。

圧倒的な速さと重みでもって、黒い獣がむかってくる。先端が鋭利にとがり、大きくうしろへ

まがった太いつの。ぶつかれば一瞬で骨が碎ける、頭より先に体がそう理解する。が、煌四はその場に縫いつけられたかのように、立ちつくすことしかできない。

みぞれが目をみはる速さで崖を駆けのぼり、おりてくる獲物よりも高い位置へ到達する。炎魔の鼻面を、犬の脚が蹴りつけた。そのわずかだが的確な衝撃で、つぎの足場をとらえようとしていた蹄が、岩を踏みそこなう。残りの崖をすべり落ちてきた炎魔は、地面に達すると荒々しく頭をふるって体勢を立てなおし、炎をやとした目をこちらへむけた。

ふたたびの突進と同時に炉六もまた駆けだした。懷から出した光るなにかを、まっすぐむかってくる炎魔のやや上へ投げあげる。小瓶だ。一瞬のうちにあらゆる色彩をふくんだ光芒を投げかける小瓶。

炉六の短刀が、自分と炎魔のあいだに落下してくる金色の瓶をないだ。

即座にガラスは砕け、すさまじい閃光が炸裂した。

「え……」

煌四は、まばたきを忘れる。まぶしい。まっ黒な森の闇が、放射状にしりぞく。黄金の光が空間を染める。動転してあと脚立ちになった炎魔へ、三日月の鎌がふるわれる気配が、はつきりと空気を裂いて伝わってくる。獣の体がどうとたおれる音。あとはもう動く気配はない。

煌四は、くらんだ目をもとにもどそうと焦った。携行型の照明はとりつつづけているのだが、炸裂した光にあふられて、目がまったくきかない。いまになってあわてて目をこする煌四の耳に、炉六の笑う声が響いてきた。

「おお、悪い悪い、先に言うのを忘れていたな。片目をつむっておくん、そうすればすぐに目が見える」

煌四は断裂を起こす視界をとりもとそうと、目をこする。いまの閃光は、それを生んだ金色の液体は、たしかに、雷火だった。

「な、なんで——炸裂型の雷瓶を」

思わず口走っていた。

「やっぱりなあ」

炉六は、いま狩ったばかりの大型の獲物から得た火を、火袋にとり入れているのだろう。声の調子から、その動作がわかる。どこかおもしろがるような声は、笑みをふくんで落ちつきはらっている。

「あの鬼の屋敷で、ただの養子としてぬくぬく暮らしているわけはなからうと思ったが。偽肉工場のお大尽は、子どもに炸裂型雷瓶なぞいじらせて、なにをする気だ。……ああ、返事はいらん。

どうせ言うなと言われとるんだらう。返事も説明もいらん。しばらく目を閉じていろ」

そばに、みぞれの体温の気配がある。犬がそばにいるという状況が、煌四はひどくなつかしかった。あなたが狩りから帰ってくると、緋名子はいつもうれしそうにしていた。父親の狩り犬は、家にいるあいだは家族全員にひとしく甘え、煌四にも背中をなでろと、よくひざにあごを載せてきた――

「目くらましとして、流れの火狩りは夜の狩りに使うんだが、首都者はそうせんらしいな。上から禁じられているんだとか。首都づきはなにかと不便だ」

煌四は乱れた脈を、ふるえる深呼吸で落ちつかせ、言われたとおり目を閉じたまま、耳を、全身の皮膚感覚を呼びさまそうとした。ここは、炎魔の森の中だ。自分には思いもよらないところから、いつどんな炎魔が襲ってきてもおかしくない。ここでは自分は、まったくの無知なのだ。

甘ったるいにおい。骨のように、血管のように視界にかぶさるいびつな木々。ここは、さながら生き物の腹の中だ。

息を吐き、まぶたをあげる。もう、目はくらんでいなかった。夜の森の中に火狩りと狩り犬のすがたをとらえ、煌四は眼鏡を直した。

「つぎの仕事に行くぞ」

煌四のようすを目のはしにとらえ、炉六は口をかたく縛った火袋を肩に担いで、ぬめりつく森の土を踏みしめて歩きだした。みぞれはするりと魚のように方向転換し、炉六のとなりをついてゆく。

（流れの火狩りが使う……）

だとすれば、油百七はだれかを金で雇って、雷瓶を作れたはずではないか。この炉六を雇うことだって。炉六は昼間、雷火を買わないかと燠火家へ持ちかけてきたというのに。

（どうしてぼくにやらせるんだ……）

《蜘蛛》が首都へ攻めてきたとき、武力となるもの。人の体を破壊し、相手を死に至らしめるもの。そんなものを、煌四が作っているのか。天候や水の流れといった、自然現象を自在に操る神族の異能にも匹敵するほどの力。雷火という強大な火を使った武器。そんなものを、煌四のようなただの人間が、あつかっていいのか。

ふいに背すが、凍りついた。

ついこのあいだまで学院で勉強を教わっていたただの子どもが、勝手にしていいものはずがない。当然だ。そしてそれは、油百七――首都の人々や回収車がまわる各村の住人の貴重な栄養源である偽肉を生産する工場の経営者であり、ほかの経営者に先立って火狩りや首都のための

貢献を惜しまない大金持ちであっても、同じだ。

（そうか……神族にばれたときに、引きとった子どもが勝手にしていたことにすれば、燠火家がうけるとがめは軽くてすむ）

胸の底に、黒々とした穴が開くのを感じた。この森の暗さよりもなおまがましい、つめたい穴。

——あれは、賜り物かもしれんなあ。

賜り物。だとしたら、この世界はむしろちゃだ。人を生かす火が、まっすぐに人を襲いに駆けてくる。燃える目に狂気をやとし、ひたむきな殺意にしたがって。

人と人とが争ったすえに、いまの世界はこんなすがたになったという。過酷な環境への適応から、炎魔が生まれたのだと。煌四は、中央書庫の天窓をふちどる顔のある星たちを思い出す。おだやかな表情で、書庫を見守る星々。黒い森に飲みこまれても、人々が守りつづけてきたこの天体の図。

こんな世界になってほしいなんて、きっとだれも思っていなかった。

——それまで、どうか生きていて。

母が最後に書いた、めちやくちやな文字。古代の火を使えた人間たちも、同じことを思ったに

ちがいない。未来に、自分たちの子孫が生きるよう願ったのにちがいない。

けれどこの星は、その上を這いずる者たちに対して、あくまで冷徹に接することしかないのだ。

音がした。暗闇に閉ざされた行く手から、なにかが聞こえてくる。獣の声、はばたき、足音、そのどれともちがう。みぞれが鼻先を上へむけ、脚を止めた。命令を待って、飼い主を見あげる。明かりを手にした炉六はわずかに肩をすくめ、口のはしに意図の読めない笑みをやとして、そのまま歩きつづけた。

ほどなくそれが人の声であることを、耳が察知する。いや、その前に、目が前方にかすかな明かりをみとめていた。自然と、すべての感覚がそこへ集まってゆく。人の話し声——怒声と、荒い息と、ときおりもれるうめき声と。

いびつな森の中にも際立つ異様な声のするほうへ、炉六はよどみなく歩を進めてゆく。

「……そうか、崖の炎魔が残っていたのは、あれを捕らえるための罠か」

低くつぶやく横顔を見あげると、その目は鋭く前方の光を見すえていた。

煌四の本能が、明かりと声のするほうへ近づくのをいやがっている。あそこには、行っってはならない。しかし一方で、同じ本能が、炉六から決してはなれるなと告げている。この金の鎌を手

にした狩人からわずかでも距離をとれば、自分たちはまち炎魔の餌食となって死ぬだろう。

角灯のガラスに塗料を塗ったのか、ねじれた木々の影を浮かびあがらせる照明はどんよりとした夕暮れ色に煤けている。

「神の体を持つというても、足がなければ立てんのだな」

言葉の形を得た声が、煌四の顔をあげさせた。それが、知っている声だったからだ。

—— たつた。

慰勞の宴の夜、庭で緋名子と呼んだ犬の名前がよみがえる。たつたは毛足の短い頑強な体つきの犬で、横はばのひろいあごで捕らえると、自分の何倍もの大きさがある獲物でも、ぜったいにはなすことがないという。かなたと組んで何度も狩りをしたことがある。いまの声はそのたつたの飼い主、先日宴席へ煌四を呼んで、元氣かとたずねてくれた火狩りのものだった。

氣づかないうちに、痛むほど奥歯を噛みしめている。森へ入るなり襲ってきた二匹の炎魔よりもおそろしいものをまのあたりにすると、頭のどこかが予感している。

炉六はいつのまにか、ぶ厚い覆いで携行型照明を隠している。煌四は、いつ自分の目が暗闇に慣れていたのか、それすらわからなかった。

ぐち、といやな音がある。食いしばった歯の奥からもれる、うめき声。前方のあの黒い木のむ

こうで、なにかがおこなわれている。

「言え。いま言えば片足は残してやる」

またべつの声。今度はしまきの主である火狩りの声だ。かなたと似た、とがった耳と鼻面をした栗毛の犬。煌四の心臓が、闇にこだまするほどどくどくとうすぎだした。あのぼんやりとした明かりの中にいるのは——煌四の知る火狩りたちなのではないか？ かつて父親とともに狩りをし、煌四や緋名子を氣づかってくれた、多少荒っぽい狩人たち。

「……急げ。さっき、光ったぞ。べつの者が近くにおる」

血なまぐさい。

煌四は息を止めた。炉六とみぞれが歩いてゆく。煌四の足もそれにしたがう。

ぼやけた明かりをせおう木をまわりこんだところで、突然に炉六が照明の覆いをはいだ。まぶしさに、その場にいた全員がすばやくふりむく。目を射られ、あわてて手をかざす。あるいは、すがめたまなざしをこちらへむけ、強い照明のみなもとをにらむ。犬たちが、身がまえて低くうなった。

煌四もまた、炉六の照明に視界をやられた。目の中に、森の木々がまとうまだら模様と同じ、青黒い影や細かな白い火がはぜる。まともに働かない目をそれでも開き、煌四は夜の森でおこな

われていたそれを見た。

木に、人が縫いつけられている。幹になかば巻きつけられ、無理な恰好をさせられた両腕の手首をくさびが貫通し、その人物を黒い木に戒めている。左足は無残なありさまだった。狩猟用の罠にかかったらしく、ふくらはぎを金属の細い綱が締めあげていた。そして、衣服の破れたひざには、手首と同じくくさびが打ちこまれ、おそらく骨が砕かれている。太もものつけ根には、深々とつき立った短い矢。

それは、炉六をふくめこの場にいる合計五人の火狩りたちと変わらない、成人した人間の男に見えた。濃いひげにおおわれた頬は、刃物でえぐったようにこけている。薄暗い照明にも、その顔や首が脂汗まみれなのが見てとれる。火狩りのまとうものと同く似た狩衣。その上に、毛皮の半纏をまとっている。まっ黒な毛皮は、森へ立ち入ってすぐに見た二度の狩りで相対した獣たちの体毛と、まったく同じ色だった。――炎魔の毛皮だ。

「〈蜘蛛〉……？」

その名が、舌の上を這い出てきた。

まだらに断絶された視界にはつきりととらえることはできないが、〈蜘蛛〉の足もとには、かなり大きな血だまりができている。あれだけの傷をおって、とつくに失神していてもおかしくな

い。木の幹へうしろむきに打ちつけられた両腕は、まがるはずでないむきに無理やりに固定されている。

しまき、たつた、いわお、かぐら。父親と狩りで組んだことのある大たち。その主である火狩りたちが、塗料によって変色させた照明の内側で、〈蜘蛛〉を拷問していた。

煌四は視界がまばらにちぎれたままの目を見開いて、その場にいる男たちを見まわす。細身のしまき、屈強なたつた、内気で牙の鋭いわお、人なつこく足の速いかぐら……それぞれの犬に、狩人たちはどこか似ていた。

その火狩りたちが、人の手がしたこととは思えない光景を作り出し、磔にされた〈蜘蛛〉をさらに痛めつけて、なにかを聞き出そうとしている。手に手に、短刀を、あるいは錐のような刃物をにぎっていた。それらに血がつき、犬たちの目は炉六の照明を反射して、まるで炎魔の目のように闇をくりぬいて光った。

――信頼できる火狩りが幾人か、秘密裏に調査してくれている……

油百七が〈蜘蛛〉について調べさせていると言っていたのは、この狩人たちだったのか？ にわかに信じがたい考えが、眼前のいびつな光景ともつれあう。

「炉六か、島の。おい、その火は隠せや。よけいな炎魔が寄ってきてはこまるのだ」